



主張

教育改革を現場から動かすために

～校長としての喜びと責任・醍醐味を振り返りながら～

水野 克己

校長の役割は、学校という大きな組織を動かし、教育ビジョンを実現することです。生徒の伸ばして欲しい力や教職員の思いを汲み取り、学校全体が目指すべき方向を示すリーダーシップが求められます。その一方で、生徒が「学校が楽しい」と感じ、教職員が「仕事にやりがい」をもてるのがビジョン実現の最大の推進力となります。

私は学校経営において「凡事徹底」を大切にしてきました。丁寧な準備や真摯な対応、一つ一つの課題に向き合う姿勢は、判断力や信頼関係を育み、働きやすさと働きがいをもたらす働き方改革にもつながると思います。また、「虫の目」「鳥の目」「魚の目」の三つの視点は校長にとって欠かせない要素です。現場の課題や細かな様子に着目する「虫の目」、組織や地域全体を俯瞰する「鳥の目」、過去を活かしつつ未来を見据える「魚の目」の視点が、柔軟で持続可能な学校運営を可能にします。

現代の学校には「誰一人取り残さない教育」が求められています。そのためには、支援が必要な生徒への配慮はもちろん、毎日登校する生徒一人一人が「明日も学校に行きたい」と思えるような教育活動にすることが重要です。社会の変化が激しく、人とのつながりが希薄で、SNS等で情報を容易に手に入れることができるようになってきた現状を鑑



みたとき、五感を働かせた体験活動や、協力して解決したり作り上げたりする良さや難しさの経験など、生徒が主体的に学び、協働を通して学び合える教育環境を作ることが、公教育が果たす大きな役割の一つであると考えています。

今年度、本県の中学校長会では特別委員会を設け、高校入試の在り方など今日的な課題について議論し、高校の校長も交えて意見を出し合いました。すぐには成果は出ませんが、この取組は教育現場からの提案が、未来の教育を変ええる力になると確信しています。県や国は、子供や教職員のために様々な施策や取組を進めています。しかし、それを具現化して取り組み、改革を進めるのは学校現場であり、その中心は校長です。現場に根ざした実践こそが教育施策を本当に機能させる鍵です。

私は校長として、コロナ対応や、学校・PTAの組織、教育活動などを見直しながら、変化する状況に応じた学校運営を模索し取り組んできました。教育の不易と流行を精査し、何より生徒の「学校が楽しい」を最大の目標に据えて、学校評価でも注視してきました。その時その時に合わせて最善と思える判断をしてきたつもりですが、二度の延期の末に中止にした修学旅行など苦い経験もあります。それも含め、これらの挑戦の中で得た教訓を次代の校長に生かしていただきたいと願っています。

校長という職務は、大きな責任とともに多くの喜びをもたらします。生徒たちの笑顔や教職員の成長に触れる瞬間が校長としての醍醐味です。どうか、校長としての使命や教育への情熱をもち続け、教育改革を現場から動かし、未来を切り拓く学校を作り上げてください。その思いを胸に、私は次のステージへ進んでいきます。

(全日中副会長・福井市光陽中学校長)